



海援隊旗(二曳きの旗)

<http://www.ryoma-kinenkan.jp>

## 生 生 SEISEI RUTEN 流 転

会期 前期:令和2年10月 6日(火)~11月 9日(月)  
後期:令和2年11月14日(土)~12月13日(日)

### 特別展

# 「薩摩と土佐」

## 「雄藩がたどった近代化の道」展

慶応2年1月、伏見の寺田屋で襲われた龍馬は「なぜ薩摩の士にこのような無礼をはたらくか」と幕吏に言い放った(慶応2年12月4日権平・一同宛)。また、品物や手紙は「薩州様西郷伊三郎」宛に送れば自分に届く、と家族に知らせている(慶応元年9月9日乙女・おやべ宛)。身寄りのない浪士であった龍馬にとって、薩摩の名を隠れ蓑に使うことができるのは、この上ないメリットだったに違いない。薩摩にとっても、海軍修業の経歴があり、浪士という自由な身分で、幕府や長州など各方面に顔の利く龍馬は、便利な存在であっただろう。薩摩藩と龍馬の深い仲は周知の通りであるが、両者ともに利益があつてこそ成り立つ関係であつたといえる。

今回の特別展は、この龍馬と、薩摩にゆかりのある土佐人を軸に、両藩の交流の歴史を紐解きたい。13代土佐藩主・山内豊熙の正室は島津斉彬の妹・候姫(智鏡院)で、山内家と島津家は親戚である。帰国時、琉球に上陸し、薩摩藩の取り調べを受けたジョン万次郎は、のちに薩摩の開成所教授に招かれた。藩の視察団に加わり、薩摩へ赴いた河田小龍は、万次郎の話を「漂異紀略」としてまとめた人物でもある。なかでも、吉田東洋を暗殺して逃亡した大石団蔵(高見弥市)は、縁あつて薩摩藩士となり、慶応元年に薩摩藩がイギリスへ派遣した留学生の一人に選ばれた異色の人物である。

薩摩と土佐の両藩はいずれも「雄藩」とされ、幕末政治をめぐる重要な局面で協力関係にあつた。島津斉彬と山内豊信(容堂)は、安政期の將軍継嗣問題で意見を共にする同志であり、参預会議、四侯会議には、斉彬の弟・島津久光と容堂がともに参加した。龍馬が仲立ちをした薩長同盟を経て、慶応3年には薩土盟約において王政復古を約した。戊辰戦争を友軍として戦い、新政府にはともに人材を輩出したが、明治6年以降、士族反乱によって政府に挑んだ薩摩と、言論で政府を批判した土佐は対照的な道を歩んだ。明治維新において、薩摩と土佐が果たした役割を、展示を通じて改めて考えたい「重要文化財2点を展示予定」。

亀尾 美香



大石団蔵(高見弥市) ロンドンで撮影した写真をもとにした肖像画(高見長臣氏所蔵)



# 「幕末と船」

「万次郎から龍馬へ」展

臨時休館後に開催 熱心な観覧の様子

(4月18日) 5月11日～6月23日

会場にある三隻の模型船(1/50縮尺)が、時代を象徴していた。

ひとつは「曜霊船」(岡義秀氏作・所蔵)。あまり知られていないが、土佐藩が初めて建造した三本マストのスクーナー型洋式木造船である。吉田東洋の指示により、種崎(高知市)で船大工・岡孫八らを取り組んだもので、土佐藩の洋式造船技術に大きな進歩をもたらすものであった。曜霊とは太陽の意味で、土佐藩の意気込みと時代の明るさを感じる。制作者の岡義秀氏は、孫八から五代目である。

あとのふたつは、「咸臨丸」と「いろは丸」(草柳俊二氏作・所蔵)。精緻なつくりは圧巻であった。咸臨丸は3本マストのスクリーユ式蒸気帆船。太平洋横断の往路では嵐に苦しめられ修理を要したが、大砲12門を搭載した軍艦の風格が伝わってくる。これには中濱万次郎も乗船し、嵐の中日本人でただ一人、アメリカ海軍ブルック大尉はじめ米米船員たちと互角に操船した。

一方、いろは丸は咸臨丸同様の3本マストのスクリーユ式蒸気帆船とはいえ、東アジア沿岸での運搬を目的とし

た貨物船であるため、重厚な軍艦とは違いすっきりとした船体デザインである。コロナ禍の影響で、公益財団法人鍋島報効会・徴古館より拝借する予定の「白帆注進外国船出入注進(いろは丸の図)」の原資料は展示できなかったが、同会のご協力によって原寸大の複製資料を展示した。和紙にスケッチされたいろは丸は、立体的な模型を見ることがよって、まさにいろは丸であるということが一目瞭然であった。同船の資料が少ない中、英国海事博物館でいろは丸断面図などの資料を入手され、正確を期して制作された草柳氏に敬意を表するばかりである。

三隻の模型を並べるとその特徴が明確であった。曜霊船は咸臨丸、いろは丸の模型と比べて小さく、稚拙に感じられた。それはまさに土佐藩の、ひいては日本の洋式船の黎明期の証である。初期の洋式帆船、軍艦、運搬船。まさに幕末の船を目の当たりに感じることができた。

この企画展において、公益財団法人琴平海洋会館・琴平海洋博物館(朝倉次郎会長、田井啓三館長)には多大な

ご協力をいただいた。『西洋軍艦構造分解図説』(19世紀初め、本木庄左衛門)は龍馬が所有し、伊予大洲藩西洋流兵学者武田斐三郎に渡したと伝わるもので、全長6メートルにも及ぶ、詳細な軍艦の構造図である。ペリー来航関係資料や、幕船の順動丸、翔鶴丸の錦絵、龍馬ゆかりの神戸海軍操練所絵図。また、明治2年5月11日、新政府海軍と旧幕府海軍との激戦を描いた『箱館港軍艦戦争図』など興味深い資料20点近くを展示させていただいた。

コロナ禍への対策によって1か月の臨時休館に入り、企画展開会延期や会期の短縮。講演会、ギャラリートークの中止という事態となった。会期を通

じた観覧者減は記録的であったが、開館後にご覧いただいた方たちの熱心な姿は印象的であった。

なお、企画展内容は、小冊子に詳しい。三隻の船については岡氏、草柳氏、また中止となった講演会は講師予定であった渋谷雅之氏による執筆文を掲載している。ぜひご覧ください。

ミュージアムショップ(直接及び通販)で販売中。A4判フルカラー28頁、500円。

前田由紀枝



会場入り口風景



展示中の「曜霊船」模型



販売中の企画展小冊子

# 文化財の大敵 — 塵埃・カビ・害虫検査 —

亀尾 美香

展示室の片隅に、家庭でよく使われるゴキブリ用トラップのようなものが置かれていたのを見たことはないだろうか。「博物館なのにゴキブリがいる！」訳ではなく、これは文化財害虫の有無を調査するためのもの。今回はそうした、博物館で行われる害虫やカビ、塵埃（ほこり）の調査についてご紹介したい。

特に紙資料においては、大小のスポット状に広がったカビの染みは消毒などで取り除くことができない。多湿環境は虫を呼び込む要因ともなるため、注意が必要となる。

以上のような「資料にとって好ましくない環境」を作らないため、多くの博物館では定期的に環境調査を実施しており、当館でも半年に一回、専門業者に調査を委託している。調査の内容は具体的に、①歩行性昆虫の有無を調べるトラップ調査（誘引剤ありとなしの2タイプ）、②ダニ等の有無を調べる室内塵調査（1mの床を1分間フィルター付の掃除機で吸い取り埃の中にいるダニ等を計測）、③空中浮遊カビ調査（エアサンプラーで空気160Lを吸い取り培地で培養）、④空中浮遊塵埃調査（パーティクルカウンターで吸い取った埃から0.5マイクロメートル以上と5マイクロメートル以上の埃の数を計測）である。当館ではこれらの調査を収蔵庫、バックヤード、常設展示室・ジョン万次郎展示室・企画展示室の各展示室（常設と

企画では壁面ケース内含む）、展示室前廊下で実施している。トラップは約2週間後に回収して解析、カビや埃のサンプル解析も併せて行い、基準値をクリアしているか否かの結果とともに、後日報告書として提出される。

今回の調査は7月に実施、結果は間もなく報告される予定であるが、良好な環境を保つには、何より日頃から注意をはらい、こまめな清掃、整理整頓を行うといった、人の手と目が不可欠である。

〔追記〕成稿にあたり、イカリ消毒株式会社高知営業所の竹内元啓氏にご協力を賜りましたことを記してお礼申し上げます。



収蔵庫内の室内塵調査



誘引剤入りのトラップ。  
タバコシバンムシを捕獲するためのもの。



左がエアサンプラー（浮遊カビ調査）、右がパーティクルカウンター（塵埃調査）



# 龍馬の手紙

08

龍馬が「大浜湊次郎」  
おおはまどうじろう

という変名に込めた思い

私が坂本龍馬を初めて知ったのは小学2年生のとき。タレントの浜田雅功さんが大好きな私は、彼が龍馬を演じたテレビドラマに夢中だった。いまでは大河ドラマでも有名な三谷幸喜さんが脚本を書き、史実に基づかない破天荒な内容が小学生にはたまらなく面白かった。夜10時から、眠い目をこすりながら観たことを覚えている。

それから、いつか桂浜で龍馬像を見てみたいと思うようになった。中学2年生で念願叶って初めて見た時は震えるような感動を覚えた。ただ、それよりも感動したのは雄大な太平洋の姿であった。

日本海に位置する山口県萩市で生まれ、岡山県の山間部である新見市で育った私にとって、海には島がたくさんある

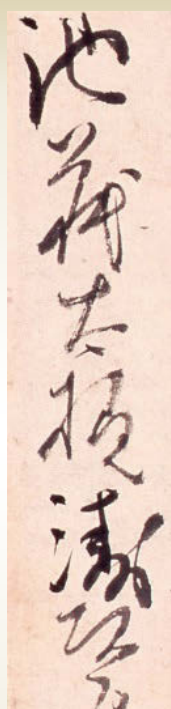
ものだと思っていた。しかし、初めて見た太平洋には島影など見あたらず、どこまでも続く水平線に圧倒された。

この景色を日常としていた龍馬も太平洋の魅力にとりつかれた一人であった。それが、「大浜湊次郎」という変名に現れていると私は考えている。龍馬の変名といえば、坂本家の本家「才谷屋」の屋号から取られた「才谷梅太郎」があまりにも有名で、残っている書簡も多い。

一方で、前者の変名が使われた事例は私が知る限り2例しかない。その1つが、高知県立歴史民俗資料館が所蔵する22日付池内蔵太宛書簡である（写真）。年月を欠くが、内容から慶応元年（1865）夏のものと考えられている。これを信用するならば、龍馬が用いた最初の変名となる。

「大浜」は、太平洋に沿って延びる土佐の砂浜を、「湊」はそこに打ち寄せる大波を示す。まさに、青春時代の私が圧倒された景色をその名にして龍馬は幕末の荒波の中にこぎ出していたのではないだろうか。

石畑 匡基  
（高知県立歴史民俗資料館 学芸員）



「池内蔵太宛書簡」（高知県立歴史民俗資料館蔵）  
差出部分  
「池蔵太様 湊次郎」

私の  
おすすめ

No.8

## 桂浜荘レストラン 『きてみいや』

今回は龍馬記念館のお隣の建物、国民宿舎・桂浜荘のレストラン『きてみいや』をご紹介します。

こちらは龍馬記念館出口より徒歩40秒。桂浜荘のエントランスを入ってすぐの場所にあり、記念館の職員が利用させていただくこともあります。桂浜を上から見下ろす絶好のロケーションの中でお茶やランチを楽しむことができます。とあって、宿泊のお客様のみならず観光のお客様にも人気のレストランです。メニューはカツオのたたきなどの定食をはじめ、龍馬カブチーノや龍馬ケーキ、土日のみ数量限定の龍馬カステラなど、高知ならではのものが並びます。（詳細は桂浜荘公式HPよりレストランメニューをご覧くださいください）

龍馬記念館は受付の際に発行するチケットをご提示いただければ当日中は再入館できますので、途中で一度退館し、レストランで一息入れて再度展示室に戻ることも可能です。ぜひ立ち寄ってみてください。



龍馬カブチーノ

佐々木恵

席からの景色

営業時間 11時～15時  
※15時～17時までは飲み物のみ  
※お食事のみのご利用の方は、宿泊状況によりご利用いただけない場合がございます。予めご了承ください。

〒781-0262  
高知県高知市浦戸城山830-25  
国民宿舎 桂浜荘  
レストラン「きてみいや」  
TEL 088-841-2201

# 『研究紀要』第2号 内容紹介

ご紹介が遅くなりましたが、去る3月末、『高知県立坂本龍馬記念館研究紀要』第2号が発行されました。昨年度創刊された当館の『研究紀要』は、龍馬やその周辺、幕末を中心とした土佐藩等をテーマとした論考を収録した研究誌です（詳しくは『飛騰』110号をご覧ください）。今号には、当館職員による、論文2本、資料紹介3本が収録されています。

本誌は、全国の都道府県立図書館や高知県内の公立図書館等でご覧いただけるほか、当館のミュージアムショップでも販売しています（通信販売あり）。専門的な内容ではありますが、それぞれの執筆者による要旨をご覧いただき、興味のある論考がありましたら、是非御味読ください。

## ある土佐藩兵の戊辰戦争 ―田島猪三郎の日記を中心に―

亀尾 美香

平成30年度企画展「大義と忠誠の戊辰戦争」展の調査過程で存在を知った、土佐藩の地下浪人・田島猪三郎の戊辰戦争関係記録（三春町歴史民俗資料館所蔵）を中心に、土佐から会津までの約8カ月間の足取りを追った。他の従軍兵士の記録と比較することで、同時期、同じ土佐藩兵として従軍していたも、戦場体験、ひいては日記の記述がかなり異なることが判明した。未刊の戊辰戦争史料もまだまだ多く、今後も研究への活用が期待できる。

## 「郷土年譜」にみる

### 土佐藩の郷土取り立て事情

高山 嘉明

土佐藩では、郷土各家から藩に家譜が提出されており、それらを集成したものが「郷土年譜」として現存する。土佐藩の郷土の実態を探る上で欠かすことのできない史料だが、「郷土年譜」を、それが藩に提出されたことの意義までを論じたような研究はこれまでなかった。本稿では、「郷土年譜」のうち、各家の郷土としての初代の情報に注目する。そこに書かれる文言の細かな異同から、これまで明らかにされなかった郷土の取り立て事情の一端を明らかにする。

## 坂本龍馬佩刀

### 「備前長船勝光宗光」寄贈をめぐって ―龍馬佩刀と

#### その来歴についての考察―

前田 由紀枝

2019（令和元）年、個人の方から記念館に寄贈のあった龍馬佩刀（脇差、銘・備前國住長船二郎左衛門尉勝光左京進宗光）についての考察を行った。90年近く所在不明であった刀の来歴と、刀の価値。刀好きであった龍馬とこの佩刀の関わりなどが中心である。それに合わせ、龍馬の遺族が持っていた三口の刀のうち、この脇差と暗殺時の佩刀（吉行）以外の一口（理忠明寿）について、後年の紹介図録の間違いについても触れている。

## 「坂本龍馬の断見録」の史料紹介

三浦 夏樹

本史料は、「英将秘訣」と呼ばれる史料の写本である。「英将秘訣」は、千頭清臣著『坂本龍馬』に初めて収録され、作者は龍馬だと推測されていた。しかし、平尾道雄によって平田派国学者グループによる著作物だと推定され、龍馬作者説は否定された。「英将秘訣」は写本の段階で加筆修正や写し間違いが多数あったようで、文意の掴みづらい条文が多い。そのため、別系統で世に伝わったと考えられるこの「断見録」を紹介することにより、今後の研究に繋がることを期待したい。

## 国沢新九郎作

### 「坂本龍馬像」について

河村 章代

国沢新九郎は西洋画の技術を日本に初めて導入した人物といわれる。元々は法律を学ぶために留学した英国で、西洋人の画家から西洋画の技法を直接学び、帰国後は画塾・彰技堂を開いた。早世したため、現存する作品は非常に少ないが、当館に、彼の油彩画「坂本龍馬像」が収蔵されている。本稿では、あまり紹介されることのなかった留学前の土佐藩士としての動向と当館収蔵作品「坂本龍馬像」について、先行研究などを基に、現時点で判明している情報を整理した。

| 高知県立坂本龍馬記念館研究紀要<br>第2号                                |             |
|-------------------------------------------------------|-------------|
| 本文<br>ある土佐藩兵の戊辰戦争<br>―田島猪三郎の日記を中心に―                   | 亀尾 美香 (1)   |
| 「郷土年譜」にみる土佐藩の郷土取り立て事情                                 | 高山 嘉明 (20)  |
| 資料紹介<br>坂本龍馬佩刀「備前長船勝光宗光」寄贈をめぐって<br>―龍馬佩刀とその来歴についての考察― | 前田 由紀枝 (27) |
| 「坂本龍馬の断見録」の史料紹介                                       | 三浦 夏樹 (30)  |
| 国沢新九郎作「坂本龍馬像」について                                     | 河村 章代 (32)  |
| 2020.3                                                |             |



# 夏休み



# 子ども教室



近年、坂本龍馬記念館の夏休みは、身近な材料で工作を楽しむ「夏休みりよつまこども教室」と龍馬や幕末に関係の深い場所やミュージアムをバスでめぐる「こどもフォーラム」を行っていました。前者は工作（創作）、後者は見学を中心にしたもの、と分けて実施していましたが、今年は、新型コロナウイルス感染拡大予防のため、両方をつにした内容を1回実施、というかたちで、開催中の企画展に関連し「和紙と遊ぼう」と題し、行うこととしました。

そして、その謎について、企画展を担当した高山学芸員からお話を聞き、「ふーん」と納得！

企画展見学のあとは、実際に土佐和紙をつかった体験と工作に挑戦。巻紙を手にとって、筆ペンで手紙を書いてみたり、昔の封筒「包紙」の折り方に挑戦しました。その後、いよいよ工作「折本」づくりです。蛇腹に追った土佐和紙に段ボール紙の表紙をつけ、思い思いに絵を描いたり、色紙を貼って完成！

盛り沢山の内容でしたが、古文書と和紙（高知県の代表的な伝統産業）に親しんでいただける時間になったと思います。

河村 章代

まず、参加者みんなで開催中の企画展「手紙の世界ー龍馬で古文書ことはじめー」展を見に行きました。その前に、A3の1枚紙を切ったり折ったりして、ミニワークブックを作り、それを参考にしながら、資料をじっくり見学。

「古文書」はくずし字で書かれていて、大人がみても、普通は「読めません」。でも読めない＝内容わからない＝面白くない…と決めつけるのはちょっと早計です。じっくりと眺めてみると…「字が逆さま」「こだけ色が違う」「名前みたいなのがはい並んでる」「字が切れる」…と、内容がわからなくても、色々な「謎」を参加者は発見してくれました。



## ここは館長の部屋

高松 清之

### 「夢のつづき」は?!

7月初旬、JR四国土讃線の入明駅（龍馬の生誕地に近く、利用者の多くが学生や若い人達のような）の愛称が「志の龍馬駅」となると同時に、駅の高架下には、全国龍馬社中が制作した「志の龍馬像」が設置され、除幕式が執り行われた。これでまた、橋本邦健会長をはじめ龍馬社中に加盟する各地の龍馬会などの「夢」のつが実現したことになる。

記念館は来年11月で満30歳を迎える。龍馬駅の実現を機に、改めて、当館の誕生に向けて昭和生まれの青年達が取り組んだ、10億円という巨額な目標の募金活動や、県庁など行政とのタフな交渉での獅子奮迅の活躍などが綴られた橋本会長の著書「龍馬道」あきらめない力」（平成22年発行）を読み返してみた。

この本の終章「夢のつづき」では、高知空港に「龍馬」を冠することができたエピソードを紹介する中で、既に、九州の龍馬会のメンバーからはJR高知駅を「龍馬駅」との提案があったことがさり気なく語られている。

龍馬空港が登場したのは、平成15年。当時わが国では空港に人名を冠した前例がなかったことから、運輸省との交渉も困難を極めた

ようであるが、突破口となつたのは、橋本会長が居酒屋で隣り合わせたパイロットの方から、室戸岬の東方に航空路線のポイントとして「RYOMA POINT」があるという話を聞いたことだと記されている。

それから時が流れて。今回の「志の龍馬駅」実現の決め手は何だったのだろう。推察してみると、2年ほど前に世界で193番目となる「JR四国龍馬会」が、当時の半井社長さんをトップとして発足したことにあるのではないだろうか。もちろん「壁」を前にしての社中の皆さんの「あきらめない力」が根底にあったことは言うまでもない。

龍馬記念館の建設、龍馬空港の誕生、200を越える龍馬関係団体の設立、そして、龍馬駅の登場など。橋本会長と龍馬社中の「夢のつづき」は果てることがない。「龍馬、おまんのために、まだまだいっぱいやることはあるきに」との呟きが聞こえてくるようである。



来年、高知県立坂本龍馬記念館は開館30周年を迎える。  
開館15周年には「反骨の農民画家 坂本直行」展（2006年、直行  
生誕100年）を開催し、多くの反響をいただいた。坂本直行（1906  
～1982）は、龍馬の甥で自由民権家坂本直寛の孫である。  
あれから15年近く経つ。坂本直行の近親者である早川禎治氏にご寄  
稿いただいた。チョッコウさんの記憶がよみがえる。

## 特別寄稿

# 「坂本直行論

## 「北からの視点」

早川 禎治



坂本直行『晩秋の原野と日高山脈』（1964年、油彩）



開拓生活に入って間もなくの坂本直行（30代初め）

坂本直行の系譜をたどると龍馬にゆきつく。義務教育の知識しかないものというのだが、ご先祖は日本の穀菽文化とちがう世界の人にみえる。北の末裔をみるとやはり同じ印象をもつ。かれは北海道の開墾につくした人であることを見え、それを真実と認めながら、それは日本的な思想を接続しない。存在は蝦夷地の植民地化の歴史と軌を一にしているかにみえる。しかし北からみれば、北の歴史におさまらない。明治以降の展開をみれば、そこに新世界建設なく日本の明治に連動してその文化を転写

しているにすぎない。札幌という都市によく象徴されている。都府県からくる観光客がいう異文化の印象は本質をみているわけではない。北海道ほどまがましいものはない。アイヌ民族の先住権を認めず自然破壊をほしきままにする。かれをかんがえるばあい、直寛の孫であり、父が彌太郎であるということは無視できない。祖父と父は敬虔なキリスト教徒であった。くわえてクラークの残した北大に学んだことはプロテスタントの精神に親近させた。孫になるとクリスチャンではないが日本

的桎梏を離脱するにより環境をあたらえられた。

なしたことはふたつある。ひとつは、畑作と酪農というあたらしい農民像を自己において確立したことである。津

軽海峡をわたった開拓者たちのほとんどが稲作を夢見るのだが、かれだけは異質である。いまひとつは山の絵である。

北に移民しても人びとの美意識の根柢にあるものは富士山と青松である。渡道しても蝦夷富士があり利尻富士があり阿寒富士がある。人びとは北にのがれてきても杉や赤松を植えたがる。

かれの絵は、天空ちかくに氷河地形をのこす日高山脈とその下に広がる赤光の柏林しかない。だれもが認めなかった世界である。ここに鮮烈な主張がある。北にすむ人たちにさえ認識できなかったものである。このように北の農民のあり方を問い、美意識において日本の伝統世界とは異なる存在を提示した。

彫刻家峯孝が十勝をおとずれたのは1956年のことである。北の農民をもとめて原野の農屋で出会ったのが直行である。胸像が札幌コンサートホール「こぼし」に展示されている。しかしながら、か



開拓農民から画家に転向した頃（50代半ば）

れは北海道を代表しない。絵はだれからも愛され過酷な条件下で混合農業を確立した人であることも知らない人はいないの。  
そういう存在を北海道がみとめないというのは興味のあることである。絵にしても道立近代美術館はまったく関心をしめさない。わかいときから一貫して反体制をつらぬいた人間であるということを知悉してゆるがないものこそ政治であり体制であろう。  
かれの偉大は、そういう体制へすり寄る生き方をしなかったところにある。身内につらなるものとして誇りにおもつ。

札幌市在住  
日本山岳会永年会員



## ■「薩摩と土佐」もっと知ろごっじゃっ、もっと知りたいちや」展

10月6日（火）から特別展「薩摩と土佐－雄藩がたどった近代化の道－」

展が開催されます。この関連企画として10月6日（火）～12月14日（月）まで、「海に見える・ぎゃらいい」では「薩摩と土佐」に関する人物銅像、伝統楽器、方言などをパネル写真で展示し、両県の更なる関係と魅力を楽しんでいただく展覧会「薩摩と土佐」もっと知ろごっじゃっ、もっと知りたいちや」展を開催します。

今回の展覧会では6項目をピックアップしてご紹介いたします。まずは、鹿児島市の鹿児島中央駅東口広場に威風堂々と建っている「若き薩摩の群像」と高知県梼原町の和田城跡に血気盛んな様子で建っている「維新の門」の群像です。「若き薩摩の群像」は、薩英戦争で海外の力を知った薩摩藩が、慶応元年（1865年）、英国へ派遣した視察員と留学生をモチーフにした群像です。彫刻家中村晋也氏により制作され、昭和57年（1982年）、50万都市の達成を記念して建立されました。そして「維新の門」の群像は、幕末文久2年（1862年）、坂本龍馬が那須俊平・信吾父子の案内で沢村惣之丞とともに脱藩した梼原にある、新しい時代を信じ生き抜いた8志士の群像です。銅像制作は濱田浩造

氏によるもので、梼原町維新の門群像建立委員会に全国の有志から寄せられた浄財により、平成7年（1995年）、建立されました。新時代を切り開こうとしたそれぞれの若き魂の鼓動をご覧ください。

次に、西郷隆盛の銅像と坂本龍馬の銅像です。西郷隆盛像は、没後50周年祭の記念として、昭和12年（1937年）、鹿児島市城山に建立されました。制作は彫刻家安藤照氏によるもので、西郷が自刃した城山を背景に軍服姿で、どっしりと立っています。坂本龍馬像は、県の青年有志が募金活動を行い、昭和3年（1928年）、高知市浦戸桂浜に建立されました。制作は本山白雲氏によるもので、和服姿にブーツというお馴染みの龍馬スタイルで、太平洋を眺めています。銅像本体の大きさはほぼ変わらないこの2体、どのような印象を持たれるでしょうか？

その他、島津忠良と関係の深かった薩摩琵琶と土佐藩郷士の門田宇平が京都で習い土佐に広めた一絃琴。そして薩摩弁と土佐弁独特の表現の違いなどを展示します。

「海に見える・ぎゃらいい」では、歴史的観点から視点を少し柔らかくしてご覧になって見てください。「薩摩と土佐」をもっと知りたくなるのではないのでしょうか？

中村 昌代



「若き薩摩の群像」 写真撮影：当館職員



「維新の門」 (写真撮影：当館職員)

### 入館状況

2020年9月20日現在

(1991年11月15日開館以来 28年310日)

◆入館者数 4,319,356人

■リニューアルオープン（2018年4月21日）以来 382,596人

### 編集後記

「コロナ夏」でもあった今年の夏は、全国各地いろいろな行事が中止になりました。高知ではよさこい祭りも中止に。高知に住む私たちは、祭の本番だけでなく、夕方になると町のあちこちから聞こえてくる練習の鳴子の音にもなじんでいるのですが、あのシャンシャンという音がない夏は夏でないようで、何とも寂しい限りでした。来年はいつもの夏に戻りますようにと、願わずにはいられません（か）。

### 館だより「飛騰」第115号

（年4回発行）表紙題字：書家 沢田 明子氏  
発行日 2020（令和2）年10月1日  
発行 公益財団法人高知県文化財団  
高知県立坂本龍馬記念館  
〒781-0262 高知市浦戸城山830  
TEL (088) 841-0001 FAX (088) 841-0015  
http://www.ryoma-kinenkan.jp  
「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00～17:00 年中無休  
入館料 一般 500円（企画展開催時 700円）  
高校生以下無料

高知県・高知市長寿手帳所持者、療育手帳・身体障害者手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者（1名）は無料



「飛騰」は郵送料のみのご負担でお届けいたします。購読希望の方は120円切手をご希望回数（4回分まで）お送りください。  
〒781-0262 高知市浦戸城山830 高知県立坂本龍馬記念館「飛騰」購読係 まで



私のテーマ

## し わ く 塩飽と龍馬



讃岐龍馬会塩飽社中  
野藤 等

はじめに

平成13年、坂本龍馬に魅かれて雑誌『歴史読本』（新人物往来社）を読んでいて、海援隊士の佐柳高次が多度津沖の佐柳島出身であることを発見して驚いた。それまで、高次は「讃岐志度の出身」（『坂本龍馬事典』昭和63年、新人物往来社）と読んでいたからだ。

そこで、坂出沖の岩黒島の知人にこのことを話した。岩黒島は、寛政年間、佐柳島から「七軒株」と呼ばれる移住者が開墾した島である。したがって、佐柳と岩黒は本家と新家の関係になる。

そこで、この知人を会長にして讃岐龍馬会塩飽社中を立ち上げた。塩飽社中と付け加えたわけは、塩飽を意識したためである。

### 1 塩飽水軍

古来、瀬戸内海の要路を占める備讃瀬戸の大小28島からなる塩飽諸島の島民は、複雑な潮の流れがある海域に暮らしていたので高い造船と操船の技術を持っていた。そのため、信長、秀吉、家康から朱印状を与えられ、海上輸送を行う塩飽水軍と呼ばれた。

江戸時代、塩飽は御用船方となり650人名の領地1250石を認められ、高松藩と丸亀藩にも属さず、自治権を与えられていた。人名とは、大名・小名に次ぐ第3の名主。丸亀沖の本島に「塩飽勤

番所」が置かれ、年寄4人が交代で執務していた。年貢は免除されたが、戦時に兵士を輸送することになっていった。北前船で東北の米を江戸に移送すること、朝鮮通信使の往來を支援すること、幕末、長崎海軍伝習所で洋式船の操船術を実習するなど、海上輸送の任に当たった。

### 2 佐柳高次

万延元年、遣米使節の随伴艦として派遣された咸臨丸に、勝海舟やジョン万次郎なども乗船していた。操船のため、50名の水夫のうち35名が塩飽水軍から選ばれた。佐柳高次もその一人で勝海舟から龍馬に紹介されて亀山社中に入った。

慶応3年4月、龍馬の乗った海援隊のいろは丸が、紀州の明光丸と讃岐の沖で衝突、艀の浦に曳航中沈没した。このとき、高次は龍馬を助け大いに活躍した。

平成14年、佐柳島に、高次の顕彰碑「塩飽の誇り」が塩飽社中によって建立された。

### 3 長岡謙吉

慶応4年、土佐藩が高松藩征討に來たとき、龍馬亡き後の海援隊長は長岡謙吉であった。本島の小坂騒動という事件を解決したのは、隊士の八木彦三郎や島村要らであった。

新政府から塩飽諸島や小豆島の管理を任された謙吉は、丸亀に本拠を置いて活動した。その本部が、謙吉の残した手紙に「白蓮社」と記されていたが、その場所が謎であった。

最近、香川県立文書館の主任専門職員嶋田典人氏が、その場所を特定された。丸亀市新浜町にある古利遍照寺である。最近、寺の門前に「海援隊解散の地」という石碑が建てられた。



海援隊解散の地



矢野道場跡

以前、丸亀の「NPO丸亀わくわく市場」の水本伸雄氏らが、龍馬が訪れた矢野市之進道場跡を法務

局の地籍図で特定され、その場所に説明板を設置された。

今後、この2つの史跡は、「骨付島市？」丸亀城下の龍馬関連史跡として龍馬ファンが訪れるだろう。

### 4 幕府オランダ留学生

幕末、幕府はオランダに軍艦を発注した。その際、15名の留学生を派遣して、実地に学ばせた。榎本武揚ら士分と職方と呼ばれた技術職が派遣されたが、塩飽から2名の職方が選抜された。

瀬居島の古川庄八と高見島の山下岩吉である。

### 5 龍馬関連

丸亀と龍馬の関連を2点挙げたい。安政3年12月、龍馬の剣術指南、北辰一刀流の千葉重太郎が、丸亀城下に来て藩校で藩士に剣術指導している。止宿した旅館は、「備前屋」であった。その跡に、先述の水本氏により説明板が設置された。

丸亀藩勤王志士の土肥大作・七助兄弟と龍馬が会っていたことが、作家伊東成郎氏により判明した。元治元年、池田屋事件に関係していた七助が江戸で龍馬と会っていたのだ。

# 「岡上家」にまつわる話あれこれ

坂本乙女の曾孫

おかのうえ  
岡上 汎告  
山梨県南アルプス市在住



## 乙女の嫁ぎ先

### 岡上家とは

坂本乙女の夫、岡上新甫（しんすけ）は香美郡西川村（現・香南市香我美町山北）の蘭医・藤田泰善の三男で同じく蘭医であった。

岡上家は土佐藩主山内家の御典医の一人として代々医業を継いできたが、九代目当主・白札格の卓庵が天保九（1838）年一月死亡。その妻と娘勢が残され、医業という特殊な仕事を護り継ぐため、新甫は家系を絶やさぬようにと迎え入れられた。天保十年、十代目当主で遺家養子の新甫二十三歳、勢十三歳であった。その後十一代目菊栄が女子で児童福祉に専念した為、医業は再び途絶え、以後医業を継ぐ者が出ていない。

では、岡上家はどういう家系なのか。現存する家系図で遡ってみる。元祖岡上善右衛門

は、天正十四（1586）年豊臣秀吉の命で長宗我部元親・信親父子と共に豊後（大分県）・大友宗麟の援軍に向かい、戸次川の戦陣にいた。時に十二月十二日島津久家軍（2万）に対し、四国連合軍（軍監仙石秀久、讃岐の十河存保・三十三歳、

（3列目右から23番目）。そして現在、高知市長浜の四国霊場33番札所で長宗我部氏の菩提寺でもある雪隠寺に隣接する「秦神社」境内の銘板にもその名を残している。

長宗我部軍合わせて6千との壮絶な戦いが、戸次川で繰り広げられた（俗にいう戸次川の戦い）。しかし、功を焦った仙石秀久の無謀な追撃命令から連合軍は溪谷に誘い込まれ、島津軍得意の釣り野伏せ戦法により大敗する。岡上善右衛門は信親（二十二歳）と共に壮絶な最期を遂げる。利光宗魚、十河存保はじめ2700人も、短時間で戦死。局地戦では日本の戦闘史上でも類を見ないものであった。戸次地区「成大寺」には顕彰碑が建立されており、岡上善右衛門の名も刻まれている



信親公御供之衆の碑＝大分市大字中沢戸次「天台宗成大寺」境内

さて、二代目岡上吉助は武士を辞して農業の道に就き（一領具足の身分にして郷士なればもつともなこと）、代を重ねて六

代目頃から医業を志し、土佐藩山内家の藩医の一人に加えられた。先の『飛騰』114号で記したように、この先祖の墓地は薊野真宗寺山の4か所にある。岡上家も六代目頃から二家に分かれており、新甫は本家筋を継いだことになる。先妻勢の墓は真宗寺山の一角にあり、新甫の墓は丹中山にある。その経緯は前号に記した。

## 乙女と夫 新甫

乙女の娘・菊栄が幼少の折住まいしていたのは、坂本家の近く上町であった。小生が歴史写真家前田秀徳氏から頂いた古地図には、岡上鶴之助の名で上町にその記載がある。戦前、祖母菊栄が小生の父や叔父叔母たちと上町を訪れた時、「このあたりと上町を訪れた時」と云ったと叔母に間違いはない」と云ったと叔母から聞いている。坂本家と岡上家はごく近い場所に位置しており、武家と医家としていろいろ

な面で代々のつながりがあり、先妻勢の亡き後乙女との縁組になったと推測する。乙女が新甫と離縁した後も、乙女はしばしば岡上家に来ていた。菊栄も垣根を越えて母の所へ遊びに行っている。

乙女と新甫が離縁した理由として、一般的に歴史家や作家の方々は、新甫が癪癪持ちでしばしば乙女に暴力をふるったためとか、奉公人公文婦喜との関係に嫉妬して実家に戻ったとか、姑の霜との折り合いが悪かったなどと書かれている。しかし、岡上家では直接の原因は龍馬の脱藩（後年許されている）により、土佐藩からのお咎めの類が及ぶのを危惧した乙女が自ら坂本家に戻ったと聞いている。

また、新甫の暴力が原因とする説には小生は異議を唱える。なぜなら、乙女は身長5尺8寸（176cm）、体重30貫（110kg）、「坂本のお仁王様」と呼ばれていた。一方の新甫は



5尺(150cm)位である。しかし江戸期から明治期の男性身長は平均5尺2寸(156cm)、それからすればものすごく小さいわけではない。むしろ龍馬や乙女の170cm超の方が当時の人から見れば大男に大女である。

話を戻せば、二人が夫婦げんかになったとしても、新甫は到底乙女の敵ではない。武術に秀でた乙女であることを承知の上で傳っていたと思う。それに新甫は隠れ(潜伏)キリシタンである。むやみに手を挙げるわけではない。

新甫は旅土産に髪の薄い乙女に毛タブ(髪)を買ってきたという。また公文婦喜さんは安芸の出身で生涯身寄りがなく、若くして岡上家に奉公に入り長く仕えてきている。先妻勢のころからである。没後天涯孤独の身を思い新甫の隣に埋葬した。しかし後年、それが菊栄自らの出生にもかかわることになるうとは夢にも思ってもみなかったらう。小生も子どもの頃、名字の違うお墓があるのが不思議で親に尋ねたことがある。父親は笑っていたが、母や叔母たちが教えてくれた「曾祖父さんをお世話しよった人よね」と。

## 岡上家の墓地

そのようなことも含め、当家の墓地を眺めると、ここになぜこんなお墓があるのだと、後世に謎を残す墓地である。正面左奥に二つの墓石がある。まず左端に藤原廉太郎なる墓石がある。これは旅役者だと聞いている。その右隣は四国巡礼のお遍路さんが二人眠っている。もとは自然石が置いてあったが、以前に兄弟合同墓石を造った際に、小生が菊栄の意思を継いで墓石を建立した。キリスト教式に墓名を「慈」として、墓碑に記している。

この墓には誰だかわからないがもう一人埋葬されていると聞いている。これはキリスト教徒だった菊栄がそれぞれの御霊を神のもとへ送るために自分の墓地に埋葬したものである。

このように岡上家の墓地には血縁でない人の墓石が存在する。墓前で眺めてみると他の墓地にない、実に不思議な墓地である。そのような風変りな墓地を、毎年春秋のお彼岸に一族総出で、丹中山から真宗寺山まで丸一日或は二日ばかりで清掃し、お参りしてきた。時には酒

盛りも始まったりするなど、心のおおらかな一族である。

## 山北に残る言い伝えと菊栄の出自



乙女の居宅地跡の碑＝香南市香我美町山北

話は変わるが、坂本乙女は新甫の実家・香我美町山北の藤田の里へひと時逗留していたとの言い伝えがある。

数年前、香南市野市町土居の野村土佐夫氏と高知龍馬空港でお会いした。出発前の僅かな時間であったが、貴重な資料を頂いた。それによると、乙女が龍馬と共に山北を訪れ、しばしの間居住していたという。その場所には地元の村上美保さんが、先祖代々の言い伝えを残すために顕彰碑を建ててくださった。新甫の後妻として嫁いできた乙女が、初めて新甫の実家へ挨拶に赴いたときのものだ。こ

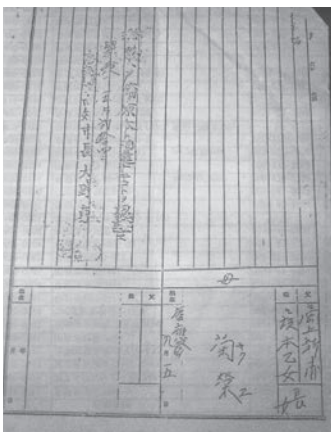
の時龍馬も乙女に同行したという話もある。

乙女は新甫の実家で菊栄を出産して、ひと時滞在したとも考えられる。龍馬が乙女を乗せてきた馬をつないだというモッコクの大木(今は桜の木)もあった。滞在した兄晩翠の診療棟兼住まいの部屋で刀を振り回し、床の間の柱に刀傷をつけたという言い伝

えもある。しかし、それを現当主の佐野氏も確認したが、見当たらないという。小生も確認したが、痕跡はなかった。

また、夕闇迫る山北川の馬淵で龍馬が刀を一振りしたところ、青白い光を放って飛んでいった鬼蜚が二つになって川面に落ちたという淵もある。これらの話は地元で昔から語り継がれてきたことらしい。

話は誇張されている面も多々あるが、何もなかったところに噂話はおきないはずだから、乙女の滞在は実際にあったことだと思われる。



岡上菊栄の戸籍原本＝昭和18年取得

龍馬の脱藩前なら安政六(1859)年ころになる。この時期菊栄を出産していれば明治元(1868)年は、九歳である。坂本家に滞在したお龍さんから刺繍を習ったという話に合致する。

菊栄は、乙女が新甫と離縁後の慶応三年九月生まれとなっているため、乙女の子ではないとする歴史家や作家の方が多いが、小生はこの乙女の山北滞在とお龍さんの刺繍を伝授された菊栄の話から、離縁後の出生はないと考える。原戸籍(明治五年の新戸籍)には、父岡上新甫、母坂本乙女、長女菊栄(慶応三年九月五日生まれ)となっている。当時の出生は親の思惑で届けられたと思うので、出生時の誤差があっても不思議ではない。また、乙女自身も母であることに異議を申し出していない。まさしく菊栄が新甫・乙女の実子であることに間違いはない。

# こぼれ話 ― 犬歩棒当記（四十三） ― 地獄極楽へようこそ

宮川 禎一

小さい頃に見た物や知ったことはなかなか忘れないものだ。それを信じて普通のことと思いつて、だが成長するにつれて、あれっ？と気付く時がある。それがとても珍しいということに。

筆者の郷里は大分県宇佐市安心院町。その珍しいものを三つ挙げておこう。

ひとつめは佐田というところにある佐田神社の境内で幕末に民間初の鉄製大砲を製造した遺跡だ。子供の頃遊んだ神社の堀が反射炉の耐火煉瓦（熔けてドロドロ）の転用で出来ていた。幕末史に関わってようやく民間で大砲を製造したとんでもない歴史事象であったことに気付く。女優の賀来千香子さんの御先祖である賀来惟熊が安政から慶応年間に独力で大砲を製造していたことは昨年NHKの番組でも取り上げられた。画面に佐田神社が映って懐かしい。

二つめは「鑛絵」と呼ばれる明治期に発達した漆喰の造形だ。民家の戸袋の表面などに彩色された鶴や兎や大黒様など様々な吉祥図像が浮彫で表されている。通学路の途中の民家の壁にも大きな富士山の鑛絵があったが、特に気にもしていなかった。しかし大分県北部に集中して見られるものであり、文化的価値が高いと

いう評価に驚く。

三つめは「地獄極楽」という名の江戸時代のテーマパークだ。橋本の桂昌寺というお寺の裏山に曲がりくねったトンネルが掘られていて、内部に閻魔大王や脱衣婆や地獄の鬼などの素朴な石像が配置されている。そこを抜ければ上向きの堅穴があり、鎖をよじ登れば極楽世界に至り、阿弥陀如来石像が待っている。今から二百年前の文政三年（一八二〇）頃に、仏画の「地獄極楽図」を三次元で造ったものだ。子供の頃から肝試し感覚でトンネルに潜っていたが、どうやら日本最古のテーマパークだったようだ。明治以前にそんな施設はほかにないらしい。そのうえ現在も営業中である（ほぼ無人だが）。

いずれも歴史的に重要だ。しかし本当は郷里の自慢話である。



地獄の閻魔様と鬼たち（地獄の裁判所）

## “話してみるかよ”

### 企画展「安田沖、異国船あらわる！」で 伝えたかったこと

島田 佳香（文化振興企画員）  
安田まちなみ交流館・和

高知県安田町近隣住民の方に企画展「安田沖、異国船あらわる！」をご案内する時の「つかみ」として、「つつばという名前を知っていますか？」と質問することがあります。するとほとんどの方が「安田の飲食店“つつば”のことですね」とお答えになります。次に「幕末期そこに大砲があったんですよ。だから“砲場”（つつば）というんです」と説明すると、驚きながらも、ご自分の身近な話題として興味を持って話を聞き始めてくれたのがわかります。

安田では唐浜に2か所大砲を設置する砲場を作ったとされていますが、これは日本とアメリカが日米和親条約を結び、鎖国政策が解かれた後の文久3（1863）年のことです。土佐ではこの年までに大部分の港50か所に大砲が設置され、海防が高められました。

異国船が沖で発見された時は、各浦々に設けられた火立場で昼間は狼煙、夜間は火を立てて通報したほか、「笹送り」という笹に書状を付けてその葉が萎めないうちに次へ送る方法がとられました。

異国船が漂着した時、浦役人、庄屋、郷士たちが警護に当たりました。特にこれらの郷士たちは「駆付郷士」と呼ばれ、文政12年12月（1830年1月）にイギリス船が室津浦（室戸市室津）へ漂着した時、安田の郷士・高松益之丞と順蔵親子も駆け付けて警固に当たり、後に藩から褒章を与えられています。

当企画展の観覧を通じ、多くの方に安田から外国と対峙し、自分たちの故郷や日本を護ろうとした人々がいたこと、幕末社会の多様な側面を読みとっていただけたのではと感じています。



企画展風景（4月22日～8月31日）

## コラム・龍馬のこと

### 松山藩と龍馬一屈かなかった手紙

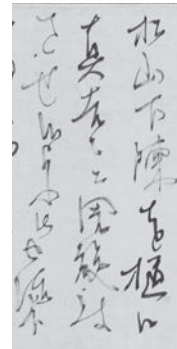
大城戸 圭一（愛媛龍馬の会）  
第32回龍馬 World 松山大会実行委員長

松山と坂本龍馬には、歴史を変えたかもしれない関係があります。それは坂本龍馬が暗殺される1ヶ月ほど前に書いた手紙です。内容は近江屋では危ないとの同志の助言に、龍馬が伊予松山藩の陣屋への転居を依頼したものです。この手紙が、宛てた望月清平に届き転居が叶っていれば、龍馬暗殺はなかったかもしれません。

なぜ龍馬は松山藩への転居を依頼したのか、松山藩とどのような関係だったのか。この件に関して詳しい資料はありませんが、私は前年の長州征伐が背景にあると考えています。

慶応2年6月に起こった第二次長州征伐の時、龍馬はユニオン号で長州側にて小倉口（小倉）の海戦に参加しています。時を同じくして、松山藩は幕府方として大島口の戦いに参戦しています。その時蒸気船の必要性から、土佐藩に船の借り受けを依頼します。松山藩と土佐藩は姻戚関係にあり、山内容堂は即決して船を貸し出しています。このことを知った龍馬は、蒸気船を巡る松山藩との関係、またその後老中職まで務めた松山藩に親近感と安心感を持ち、その思いを手紙に込めたのではないのでしょうか。

屈かぬ手紙と同じく、龍馬ファンの集いである「第32回龍馬 World 松山大会」もコロナウイルス感染拡大による影響で、松山の地に集い交流する想いは届きませんでした。今回の大会は新たな生活様式下の新たな形として、TV会議システムを使ったオンライン大会へと変更しました。出合いの達人・坂本龍馬に思いを込めて。



慶応3年10月18日 望月清平宛 龍馬書簡（一部）

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会  
〒781-0262 高知市浦戸城山 830

TEL (088) 841-0001 FAX (088) 841-0015  
mail:gendai-ryoma@kochi-bunkazaidan.or.jp